

## 「修飾」に関する一学説について

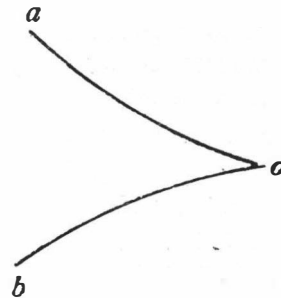
佐々木 達

米国の University of Southern California のスペイン語とポルトガル語の教授である D. L. Bolinger が PMLA という語学雑誌の Vol. 67, No. 7 (1952年12月) に“Linear Modification”(線条的修飾) という論文を寄せている。いまその内容の大体を紹介し多少の私見を加えたいと思う。

Bolinger は言う。言語表現は本質上「線条的」(linear) であるから、その当然の結果として文の要素間の相互関係には次の四種あるはずである。即ち(1)空間的關係。(a)要素Aは要素Bに「隣接」しているか「隔離」しているか。(b)AはBに対して「内在」しているか「外在」しているか。(2)時間的關係。(a)特定の要素が「先頭」に現われるか「最後」に現われるか。(b)要素Aは要素Bに「先行」するか「後続」するか。以上二種の関係のうちこの論文では(2)の時間的關係のみを問題とし、かつ考察の範囲を英語とスペイン語にとどめる。

今、話し手が談話を開始するばあいを想像するのに、談話の開始前は彼が伝達しよう内容はほとんど無限である。ところが最初の一語が表現されると、内容の可能性は非常に減じるが、しかしなおその第一語のもつ「伝達性」(communicative value)はその語の意味範囲の全部にわたっていると考えられる。次に第二語が

表現されるとこれが第一語の意味の範囲を狭げ、さらに第三語はそれを一層狭げ、という過程を経て最後に表現はある一つの事実に焦点を固定され、それによって聞き手はその意味を理解するという結果になる。この過程を図示すると



a, bは話し始めの瞬間を示し、  
oは話し終りの瞬間を示す。

いま例を挙げてこのことを説明するため英語の“John eats”という表現をとる。この表現の開始される以前にはいかなる内容も伝達可能である。しかるに“John”が表現されると、この可能性は減じるが、しかしまだ“John”について述べる内容はほとんど無限で

ある。しかし“eats”が現われると、内容は「食べる」という行為の一種に限定されてしまう。そこでこの“eats”の“John”に対するような関係を自分は“modification”と呼ぶことにする、と Bolinger は云うのである。

次に彼はスペイン語の例を挙げて、ここに“Juan canta”(John

sings) と “Canta Juan” (Sings John) という例がある。“Juan canta” は通例 “John sings (for a living), John is a singer” という意味であり, “Canta Juan” は通例 “John is singing now” という意味である。どうしてこうなるかという点, “Juan canta” では “canta” が “Juan” を「修飾」(modify) するため, その意味が Juan は生計のためには物を書いたり機を織ったりはしないで『歌を歌う』のであるという内容になる。これに対し “Canta Juan” では “Juan” が “Canta” を「修飾」しその意味を狭めるから, 歌うのは余人ではなく『Juan である』という内容になる。この二つの例において第二の要素はともに「選択的対照」(selective contrast) を表わすが, このような性質の要素は(英語, スペイン語では)表現の末尾におかれるのである。

同様な事実は名詞と形容詞の結合にも見られる。スペイン語の “un hermoso edificio” (a beautiful building) と “un edificio hermoso” (a building beautiful) とを比較すると, 前のほうが即ち「形容詞+名詞」では全体は一個の意味単位(semantic unit)を成すが, 后者「名詞+形容詞」では「建物」(edificio) は「美しく(hermoso) ない」建物と対照させられている。言いかえると, 形容詞が先行するときは, それは後続する名詞の全体を「覆い」(overshadow), 逆に後続する形容詞は先行する名詞を「分割」(split) するのである。これを図示すれば



Bolinger はさらに英語における「名詞+形容詞」の結合について次のように議論を進める。彼は云う, 英語にはスペイン語とちがひ形容詞が名詞の後におかれることは例外であるが, “linear modification” の立場から見て注意すべきばあいがある。

Mary beautiful is something hard to imagine.

A man unhappy is a social risk.

Lions are always fearsome, but a lion hungry is the terror of the jungle.

上記第二例の “A man unhaphy” の名詞と形容詞との修飾関係を図示すれば



となり既述の “un edificio hermoso” のばあいと一致するが, ここで “unhappy” が表わしているのは「選択的対照」ではなくて「自己対照」(self-contrast) であると云うべきである。なぜならば “un edificio hermoso” (美しい建物) では「美しくない他の建物」が対照の相手となっているのに反し, “a man unhappy” では, その同じ “A man” の “unhappy” でない状態が対照されている。云いかえれば “a man unhappy” = “a man who happens to be unhappy”(たまたま不幸な目にあっている人) という意味であり, その人の「不幸」は「一時的状態」であることを示す。ところが “an unhappy man” という「形容詞+名詞」の結合では「不幸」はその人の「恒常的状态」であることを示す。「自

己対照」とはこのような性質のものであるが、同時に注意すべきことは、“a man unhappy”では形容詞が名詞から「分離しうる性質」(detachability)をもっていることである。

「対照」にはもう一つ違った種類のものがある。それは「枚挙的対照」(enumerative contrast)と呼ぶべきもので、次のようなばあいがある。

Do you see her Tuesdays ?

という問いに対して通例

No, Tuesdays I stay home.

または

No, I see her Mondays.

といふ返事をする。これらの代りに

No, Mondays I see her.

のように Mondays を先行させる云い方はしない。しかし

Do you see her Tuesdays ?

に対して

No, Tuesdays I stay home; Mondays I see her.

と答えるのは普通である。その理由は“Tuesdays”と“Mondays”とが文頭におかれて相互に「対照」されているからであり、この種の対照を「枚挙的対照」と呼ぶのである。同様な例は

Tell me about your plans.

という要求に対して

Well, tomorrow I intend to work, and day after I'll go fishing.

と答えるようなばあいにも見られる。これらの例において“Tues-

days”, “Mondays”; “tomorrow”, “day after” は後続する部分を「修飾」することなく、逆に後続部分から「修飾」されるのである。

以上が Bolinger の学説の概要であるが、かなり独創的な意見が含まれ、一般に文の構造を理解するうえに参考となる点が多いと思われる。そこで彼の学説をもう一度ふり返ってその内容を検討してみたい。

最初に「修飾」(modification)という術語が従来とは異なる意味に用いられていることである。たとえば英文法では“a very warm day”という表現では“very”が“warm”を「修飾」し、“warm”が“day”を「修飾」するというのが通常の説明である。Bolinger は逆に“day”が“warm”を、“warm”が“very”を「修飾」と説くのである。この相違は従来の「修飾」という術語が表現の要素間の「論理的」関係を意味したのに対し、Bolinger の「修飾」は同じ要素間の「心理的」関係を意味する点にあると云えよう。たとえば Bolinger の挙げている“a beautiful building”と“a building beautiful”(スペイン語の代りにそれに相当する英語の例を用いる)とを比べてみると、この二つの表現の「論理的」内容には差違はなく、二つの“beautiful”はともに“building”なる「実体」の「属性」を表わし、その意味で“beautiful”は“building”を「修飾」している、と云わなければならない。

しかるに Bolinger の説くごとく“a building beautiful”では「美しい建物」は「美しくない(他の)建物」と対照されることもまた事実である。この事実を従来英文法家は「beautiful の意味

が強調 (emphasize) される」と説明してきたが、そのような「強調」は実は“beautiful”の意味が他“ugly”, “pretty”, “plain”等の形容詞の意味と対照されることから生じるのである。さらにこの考えを押し進めるならば、Bolinger は注意していないようであるが、“a beautiful building”では通例“building”の意味が「強調」されるという事実を知らなければならない。そしてその強調はこの表現が前の表現とことなり“a beautiful woman”, “a beautiful tree”, “a beautiful scene”など他の名詞の意味と対照されることから生じるのである。

このように考えると“a beautiful building”と“a building beautiful”とではその「論理的」内容はまったく同一であるが、前者では“building”の意味が他の意味と対照され、后者では“beautiful”の意味が他の意味と対照される結果、それぞれの部分が強調されるのである、ということになる。云いかえれば、同じ論理的内容がことなる「心理的環境」におかれるため、ことなる部分が対照による強調を受けるということである。しかし Bolinger の学説の結論が以上の事実に至るならば、それはけっして独創でなく、従来の「心理的主辞」(psychological subject)は一般に「心理的賓辞」(psychological predicate)に先行するという見解を再説したにすぎないのである。

そこで Bolinger の所説の他の重要な部分に目を転じたい。それは彼が「形容詞+名詞」の結合では「一個の意味単位」を成し「名詞+形容詞」では形容詞は「分離性」をもつ、と云っていることである。その理由は何も述べられていないし、また彼の図示からも十分な示唆を得ることができない。もっとも彼は先行する

形容詞は后続する名詞を「覆い」、后続する形容詞は先行する名詞を「分裂」とは云っているが、これも精密な説明ということとはできない。

ここで想起したいのは、既述の論理的内容のおかれる「心理的環境」ということである。たとえば“a beautiful building”と“a building beautiful”において、形容詞が先行する前者では、「美しい建物」なる内容は「美しい樹木」「美しい風景」「美しい婦人」など「美しいもの」なる環境の中におかれている。これに対し“a building beautiful”では「美しい建物」なる同一の内容が「醜い建物」「可も不可もない建物」など「美しからざる建物」を含む環境の中におかれているはずである。この点を指しておそらく Bolinger は前のばあいには形容詞が名詞を「覆い」、後のばあいには形容詞が名詞を「分裂」させると述べたものであろう。しかしたとえこの後の“a building beautiful”において形容詞“beautiful”が名詞“building”の意味を「分裂」させるかどうかは非常に疑わしい。むしろこのばあい形容詞は名詞の意味を「補足」(complete)し「追加」しているものと考えべきではないか。“a building beautiful”とは“a building and a beautiful one (not ugly, not plain, not indifferent…)” (建物であってかつ美しいもの、醜くないもの)のごとき含意をもつものではなからうか。即ち同じく「美しい建物」なる内容を表わす表現であるが、その内容に到達する過程は以上のような性質のものと考えられる。これに対し“a beautiful building”ではこの過程がことなり、まず「美しいもの」という意味が与えられ、次に「美しいもの」の一例として「美しい建物」が「抽出」(select)されるので

あろう。その意味で逆に形容詞が名詞を「包摂」(contain)すると云うことはできよう。Bolinger が “a building beautiful” では形容詞が名詞から「分離的」であると云うのも、要するに形容詞が名詞に対して「補足的」であることから生じるのであろう。そしてさらに考えるならばこの問題は語と語との間の「限定」(determination)の差違という問題になり、かつその差違によって語の集合 (word-group) にいくつかの種別が生じ、形容詞と名詞との上記二種の結合はその種別のうちの二つに相当するという結論にまで発展するはずであるが、ここではその点まで論じることは不可能である。(完)

—東京外国語大教授—